

ES/1 NEO

CSシリーズ

設計構築ガイド

第11版 2025年2月

©著作権所有者 株式会社 アイ・アイ・エム 2025年

© COPYRIGHT IIM CORPORATION, 2025

**ALL RIGHT RESERVED. NO PART OF THIS PUBLICATION MAY
REPRODUCED OR TRANSMITTED IN ANY FORM BY ANY MEANS,
ELECTRONIC OR MECHANICAL, INCLUDING PHOTOCOPY RECORDING,
OR ANY INFORMATION STORAGE AND RETRIEVAL SYSTEM WITHOUT
PERMISSION IN WRITING FROM THE PUBLISHER.**

“RESTRICTED MATERIAL OF IIM “LICENSED MATERIALS – PROPERTY OF IIM

目次

第 1 章 はじめに	1
1.1. マニュアルの構成	1
1.2. 用語の定義	1
第 2 章 ES/1 NEO CS シリーズの導入／運用設計	2
2.1. データ収集対象：パフォーマンスデータのサイズ	2
2.1.1. Acquire 収集データ	2
2.2. 管理用マシン：サイジングガイド	3
2.2.1. Control Center のハードウェア要件	3
2.2.2. Control Center が必要とする 100 ターゲット当たりの CPU 能力	3
2.2.3. パフォーマンスデータベース (PDB) の増加サイズ	4
2.2.4. フラットファイルのサイズ	6
2.2.5. Performance Web Service データベースのサイズ	9
2.3. サービス一覧	10
2.3.1. データ収集対象	10
2.3.2. 管理用マシン	10
2.4. ポート番号一覧	12
2.4.1. 管理用マシン→データ収集対象	12
2.4.2. データ収集対象→データ収集対象	13
2.4.3. データ収集対象→管理用マシン	14
2.4.4. Performance Web Service 閲覧クライアント→管理用マシン	14
2.4.5. athene Portal 閲覧クライアント→管理用マシン	14
2.4.6. 管理用マシン→管理用マシン	14
2.5. ログファイル一覧	15
2.5.1. データ収集対象	15
2.5.2. 管理用マシン	16
2.6. リターンコード一覧	20
2.6.1. リターンコード	20
2.6.2. データ収集対象	20
2.6.3. 管理用マシン	21
2.7. ウィルススキャンの除外対象一覧	23
2.7.1. データ収集対象	23
2.7.2. 管理用マシン	24
2.8. 製品仕様に関する考慮事項	25
2.8.1. CS シリーズ全般	25
2.9. 管理用マシンの運用に関する考慮事項	29
2.9.1. CS シリーズ全般	29
第 3 章 添付資料	32

3.1. 添付資料 A. ES/1 NEO CS シリーズで扱うパフォーマンスデータのソース	32
3.1.1. データ項目対応表_AIX	32
3.1.2. データ項目対応表_HP-UX	32
3.1.3. データ項目対応表_Solaris	32
3.1.4. データ項目対応表_Linux	32
3.1.5. データ項目対応表_Windows	32
3.1.6. データ項目対応表_SQLServer	32
3.1.7. データ項目対応表_IIS	32
3.1.8. データ項目対応表_Oracle	32
3.1.9. データ項目対応表_Symfoware	32
3.1.10. データ項目対応表_DB2	32
3.1.11. データ項目対応表_HTTP	32
3.1.12. データ項目対応表_WebSphere	32
3.1.13. データ項目対応表_OracleAWR	32
3.1.14. データ項目対応表_WebLogic	33
3.1.15. データ項目対応表_JBoss	33
3.1.16. データ項目対応表_Tomcat	33
3.1.17. データ項目対応表_VMware	33
3.1.18. データ項目対応表_JOB for JP1	33

第1章 はじめに

このマニュアルは、ES/1 NEO CS シリーズの導入と運用の設計に関連する情報について記載したものです。
実際の ES/1 NEO CS シリーズ各製品の詳細に関しては、それぞれ対応した別紙マニュアルを参照してください。

1.1. マニュアルの構成

本マニュアルは、次の各章で構成されています。

(1)はじめに

マニュアルの構成とマニュアル内の用語の定義について記載しています。

(2)ES/1 NEO CS シリーズの導入／運用設計

ES/1 NEO CS シリーズの導入と運用を設計する際に必要となる製品仕様および考慮事項について記載しています。

(3)添付資料

添付資料 A. ES/1 NEO CS シリーズで扱うパフォーマンスデータのソース

ES/1 NEO CS シリーズで扱うパフォーマンスデータのソースについて記載しています。

1.2. 用語の定義

本マニュアルで使用する用語を以下のように定義します。

用語	定義
データ収集対象	ES/1 NEO CS シリーズの各製品がパフォーマンスデータを収集する対象。 <ul style="list-style-type: none">・Unix/Linux/Windows サーバ・データベース（Oracle、SQL Server、DB2 等）・Java アプリケーションサーバ（WebLogic、WebSphere 等）・SAP ERP・HTTP サーバ（Apache、IIS）・仮想化環境（VMware、Hyper-V 等）・ストレージ装置（NetAPP）・クラウドサービス（Amazon Web Services）・ネットワーク（TCP パケット、MIB）
管理用マシン	「データ収集対象」から収集されたパフォーマンスデータを変換・蓄積し、グラフやパフォーマンス評価結果を生成する ES/1 NEO CS シリーズの製品が導入されている Windows サーバマシン。
ローカル収集	「データ収集対象」側に導入したエージェントプログラムが、「データ収集対象」のローカル内でパフォーマンスデータを収集する方式。
リモート収集	「管理用マシン」側に導入したプログラムがネットワーク経由で「データ収集対象」からパフォーマンスデータを収集する方式。

第2章 ES/1 NEO CS シリーズの導入／運用設計

2.1. データ収集対象：パフォーマンスデータのサイズ

2.1.1. Acquire 収集データ

ここでは、データ収集対象サーバのローカルに出力される Acquire 収集データのサイズの目安について記載します。

通常の運用形態では、Acquire 収集データファイルはデータ収集対象サーバのローカルに一時的に保管されます。それらのファイルが管理用マシンに正常に転送されると、一定期間経過後にデータ収集対象サーバのローカルから自動的に削除されます。

なお、データ収集対象サーバの構成／環境、および、稼働している業務の内容や処理量によって、パフォーマンスデータのサイズは大きく変動します。

OS 種別	データ種別	圧縮／非圧縮	1 インターバル当たりのデータサイズ (15 分間隔収集の場合)	データサイズの主な変動要素
Unix/Linux	システム	圧縮	20KB～50KB	プロセッサ数、ディスク数、NIC 数、常駐プロセス数
	アカウント		5KB～1MB	実行完了コマンドまたはプロセス数、コマンドの種類数 ※コマンドの種類数によってファイルの圧縮効率が大きく異なります。同じコマンドが連続して大量に発行されている場合、圧縮効率が良いため、コマンド数が多くてもサイズが小さくなります。
	ファイルシステム		1KB～5KB	ファイルシステム数
	Oracle		10KB～100KB	データファイル数、セッション数、セッション待機イベント数
Windows	システム・プロセス	非圧縮	70KB～150KB	プロセッサ数、物理ディスク数、論理ドライブ数、実行プロセス数
	Oracle		30KB～500KB	データファイル数、セッション数、セッション待機イベント数
	SQL Server		30KB～100KB	データベース数

15 分間隔収集の場合、1 日は 96 インターバル (4×24 時間) です。上記データサイズを 96 倍したものが 1 日分のサイズのおおよその目安になります。

2.2. 管理用マシン：サイジングガイド

ここでは、管理用マシンに必要とされる CPU 能力／ディスク容量の目安について記載します。管理用マシンのハードウェアリソースを見積もる際の参考にしてください。

なお、実際に使用されるハードウェアリソースは、処理対象のパフォーマンスデータの内容によって大きく変動します。

2.2.1. Control Center のハードウェア要件

Control Center をインストールする管理用マシンは、前提として以下のハードウェア要件を満たしている必要があります。

リソース	スペック
CPU	Xeon 4 コア以上
メモリー	16GB 以上
ハードディスク	①システムドライブに 10GB 以上の空き領域 ②データ格納用として 200GB 以上の領域

2.2.2. Control Center が必要とする 100 ターゲット当たりの CPU 能力

Control Center が 100 ターゲットのパフォーマンスデータを処理する場合に必要な CPU 能力の目安は、以下の通りです。

ターゲット種別	必要な CPU 能力 (GHz/100 ターゲット)
Unix/Linux	1.68GHz
Windows	0.42GHz
Oracle	1.68GHz
SQL Server	0.42GHz

(例)

Unix/Linux : 200 ターゲット

Windows : 150 ターゲット

Oracle : 10 ターゲット

この場合、必要な CPU 能力の目安は次のようになります。

2×1.68 (200 Unix/Linux)

$+ 1.5 \times 0.42$ (150 Windows)

$+ 0.1 \times 1.68$ (10 Oracle)

$= 4.158\text{GHz}$

Control Center、CS シリーズ製品、Performance Web Service が同一の管理用マシンで稼働する場合は、上記よりもさらにリソースが必要となります。

2.2.3. パフォーマンスデータベース（PDB）の増加サイズ

ここでは、パフォーマンスデータベース（PDB）の増加サイズに関する参考情報を記載します。

Control Center は、Acquire 収集データを SQL Server 形式のデータベースであるパフォーマンスデータベース（PDB）に蓄積します。パフォーマンスデータベース（PDB）は、以下の 2 ファイルで構成されます。

- ・<パフォーマンスデータベース名>.mdf : 実データが格納されるファイル
- ・<パフォーマンスデータベース名>_log.ldf : トランザクションログファイル

(1) パフォーマンスデータ蓄積時の増加サイズ

Acquire 収集データをパフォーマンスデータベース（PDB）に蓄積する場合の増加サイズの目安は、以下の通りです。

対象ファイル : <パフォーマンスデータベース名>.mdf
Acquire データ収集間隔 : 15 分
データ蓄積期間 : 1 日（96 インターバル）

ターゲット種別	1 インターバル当たりの Acquire 収集データサイズ	<PDB>.mdf の増加サイズに影響を 与える代表的な変動要素の数	1 ターゲット当たりの 1 日分の <PDB>.mdf の増加サイズ
Unix/Linux	システム : 約 20KB アカウント : 約 5KB ファイルシステム : 約 1KB	CPU 数 : 2 ディスク数 : 3 コマンドの種類数 : 約 260 ファイルシステム数 : 3	約 5MB
Windows	約 70KB	プロセッサ数 : 2 物理ディスク数 : 5 論理ドライブ数 : 5 実行プロセス数 : 約 50	約 4MB
Oracle	約 10KB	データファイル数 : 19 セッション数 : 約 30	約 8MB
SQL Server	約 32KB	データベース数 : 9	約 2MB

実際の<パフォーマンスデータベース名>.mdf の増加サイズは、Acquire 収集データの内容によって大きく変動します。

対象ファイル : <パフォーマンスデータベース名>_log.ldf
Acquire データ収集間隔 : 15 分
データ蓄積期間 : 1 日（96 インターバル）

ターゲット種別	1 インターバル当たりの Acquire 収集データサイズ	1 日分の<PDB>_log.ldf の増加サイズ
Unix/Linux	システム : 約 20KB アカウント : 約 5KB ファイルシステム : 約 1KB	約 49KB
Windows	約 70KB	約 49KB
Oracle	約 10KB	約 133KB
SQL Server	約 32KB	約 49KB

パフォーマンスデータベース（PDB）にデータを蓄積する場合の<パフォーマンスデータベース名>_log.ldf（トランザクションログ）の増加サイズは、<パフォーマンスデータベース名>.mdf に比べて非常に小さくなります。

(2)過去のパフォーマンスデータ削除時におけるトランザクションログの増加サイズ

Control Center が蓄積したパフォーマンスデータベース（PDB）から過去のパフォーマンスデータを削除する際に、<パフォーマンスデータベース名>_log.ldf（トランザクションログ）のファイルサイズが急激に増加します。トランザクションログの増加サイズに対して、十分なディスク空き容量が無いと過去データの削除処理が失敗します。

ここでは、過去データの削除処理におけるトランザクションログの増加サイズに関する参考情報を記載します。

対象ファイル : <パフォーマンスデータベース名>_log.ldf
Acquire データ収集間隔 : 15 分
データ削除期間 : 7 日

パフォーマンスデータベース（PDB）内のデータが連続している期間を「Period」と呼び、Period は最長 7 日間で構成されます。過去データの削除は、Period 単位で行われます。

ターゲット種別	1 インターバル当たりの Acquire 収集データサイズ	<PDB>.mdf の増加サイズに 影響を与える代表的な 変動要素の数	削除対象の <PDB>.mdf のサイズ	1 ターゲット当たりの 7 日分のデータ削除時に おける<PDB>_log.ldf の 増加サイズ
Unix/Linux	システム : 約 20KB アカウント : 約 5KB ファイルシステム : 約 1KB	CPU 数 : 2 ディスク数 : 3 コマンドの種類数 : 約 260 ファイルシステム数 : 3	約 35MB	約 50MB
Windows	約 70KB	プロセッサ数 : 2 物理ディスク数 : 5 論理ドライブ数 : 5 実行プロセス数 : 約 50	約 28MB	約 40MB
Oracle	約 10KB	データファイル数 : 19 セッション数 : 約 30	約 56MB	約 80MB
SQL Server	約 32KB	データベース数 : 9	約 14MB	約 23MB

実際の<パフォーマンスデータベース名>_log.ldf の増加サイズは、削除対象のデータ量によって大きく変動します。

2.2.4. フラットファイルのサイズ

ここでは、フラットファイルのサイズに関する参考情報を記載します。

CS シリーズの各製品によって収集・変換されたパフォーマンスデータは、フラットファイルと呼ばれる gz 形式の圧縮ファイルまたはテキスト形式のファイルに蓄積されます。フラットファイルは、〈サイト〉 / 〈システム〉 / 〈日付〉 単位に分けられて保存されます。

(1)リソースデータ 詳細フラットファイルのサイズ見積もりサンプル

詳細フラットファイル 1 日分のサイズ目安は、以下の通りです。

対象ファイル : 詳細フラットファイル (YYYYMMDD.txt.gz または YYYYMMDD.txt)

データ収集間隔 : 15 分

データ蓄積期間 : 1 日 (96 インターバル)

データ種別	1 インターバル当たりの フラットファイルサイズ	フラットファイルサイズに影響を 与える代表的な変動要素	1 システム当たりの 1 日分の フラットファイルサイズ (gz 圧縮形式)	1 システム当たりの 1 日分の フラットファイルサイズ (テキスト形式)
Unix/Linux	約 120KB	CPU 数 ディスク数 コマンドの種類数 ファイルシステム数	約 1.7MB	約 11MB
Windows	約 60KB	プロセッサ数 物理ディスク数 論理ドライブ数 実行プロセス数	約 0.9MB	約 6MB

実際のフラットファイルサイズは、収集データの内容により大きく変動します。

(2)DB データ 詳細フラットファイルのサイズ見積もりサンプル

詳細フラットファイル 1 日分のサイズ目安は、以下の通りです。

対象ファイル : 詳細フラットファイル (YYYYMMDD.txt.gz または YYYYMMDD.txt)

データ収集間隔 : 15 分

データ蓄積期間 : 1 日 (96 インターバル)

データ種別	1 インターバル当たりの フラットファイルサイズ	フラットファイルサイズに影響を 与える代表的な変動要素	1 システム当たりの 1 日分の フラットファイルサイズ (gz 圧縮形式)	1 システム当たりの 1 日分の フラットファイルサイズ (テキスト形式)
Oracle※	約 120KB	データファイル数 セッション数	約 1.7MB	約 11MB
SQL Server	約 10KB	データベース数	約 0.2MB	約 1MB

実際のフラットファイルサイズは、収集データの内容により大きく変動します。

Oracle、SQLServer は 1 インスタンスあたりのサイズを表示しています。

※見積もりに Oracle セグメントデータは含まれません。Oracle セグメントデータを収集する場合は別途見積もりをしてください。

(3)VMware データ 詳細フラットファイルのサイズ見積もりサンプル

詳細フラットファイル 1 日分のサイズ目安は、以下の通りです。

対象ファイル : 詳細フラットファイル (YYYYMMDD.txt.gz または YYYYMMDD.txt)
 データ収集間隔 : 15 分
 データ蓄積期間 : 1 日 (96 インターバル)

データ種別	1 インターバル当たりの フラットファイルサイズ	フラットファイルサイズに影響を 与える代表的な変動要素	1 システム当たりの 1 日分の フラットファイルサイズ (gz 圧縮形式)	1 システム当たりの 1 日分の フラットファイルサイズ テキスト形式)
VMware	VM 毎に約 10KB ESX ホスト毎に約 22KB データストア毎に約 3KB その他約 16KB	リソースプール数 仮想ディスク数 LUN 数 クラスタ数 NW アダプタ数	1 インターバルあたりのフラット ファイルサイズから集計した 結果×0.15	1 インターバルあたりのフラット ファイルサイズから集計

VMware 稼働情報は、構成により特に容量の変動幅が大きいので、あくまで参考値として参照してください。

(4)SAP データ 詳細フラットファイルサイズのサンプル

SAP データは変動要素による影響が大きいので、環境毎のフラットファイルサイズのサンプル値を提示します。

対象ファイル : 詳細フラットファイル (YYYYMMDD.txt.gz または YYYYMMDD.txt)
 データ収集間隔 : 15 分
 データ蓄積期間 : 1 日 (96 インターバル)

データ種別	フラットファイルサイズに影響を 与える代表的な変動要素の数	1 システム当たりの 1 日分の フラットファイルサイズ (gz 圧縮形式)	1 システム当たりの 1 日分の フラットファイルサイズ (テキスト形式)
SAP (ケース 1)	トランザクション件数 2,700,000/日 SM20 件数 280,000/日	約 81MB 内訳 : STAT データ 約 74.6MB SM20 データ 約 6.5MB	約 540MB 内訳 : STAT データ 約 497MB SM20 データ 約 43MB
SAP (ケース 2)	トランザクション件数 260,000/日 SM20 件数 170,000/日	約 9.8MB 内訳 : STAT データ 約 7.7MB SM20 データ 約 2.1MB	約 65MB 内訳 : STAT データ 約 51MB SM20 データ 約 14MB
SAP (ケース 3)	トランザクション件数 65,000/日 SM20 件数 35,000/日	約 2.3MB 内訳 : STAT データ 約 1.8MB SM20 データ 約 0.5MB	約 15MB 内訳 : STAT データ 約 12MB SM20 データ 約 3MB

SAP データのフラットファイルは、業務量により値が大幅に変動します。特に、STAT・SM20 データの変動幅が大きいので、上記の目安を参考に実際に出力される環境に合わせて見積もりをしてください。

STAT 件数はユーザのダイアログ処理量に依存します。SM20 件数はユーザの処理量 (ログオン/ログオフや TRX の実行量) および Trx.smx のセキュリティクラスにより収集データ量が変動します。

(5) HTTP アクセスログデータ 詳細フラットファイルサイズのサンプル

HTTP アクセスログのフラットファイルはアクセス件数、URL の長さ、および log2f.exe 実行時のフィルタファイルの設定により大きく変動するため、環境毎のフラットファイルサイズのサンプル値を提示します。

対象ファイル : 詳細フラットファイル (YYYYMMDD.txt.gz または YYYYMMDD.txt)
データ収集間隔 : 15 分
データ蓄積期間 : 1 日 (96 インターバル)

データ種別	フラットファイルサイズに影響を与える代表的な変動要素の数	1 システム当たりの 1 日分のフラットファイルサイズ (gz 圧縮形式)	1 システム当たりの 1 日分のフラットファイルサイズ (テキスト形式)
HTTP (ケース 1)	アクセス件数※ 15,962,000 件	約 25.1MB	約 1670MB
HTTP (ケース 2)	アクセス件数※ 1,287,000 件	約 15.8MB	約 105MB
HTTP (ケース 3)	アクセス件数※ 91,000 件	約 1.8MB	約 12MB

上記の容量には、WEB ページ集約機能による収集データは含みません。WEB ページ集約機能を有効化する場合に別途見積もりをしてください。

※アクセス件数は log2f.exe 実行時のフィルタファイルによる URL フィルタ後の件数になります。

(6) Java データ 詳細フラットファイルサイズのサンプル

Java データのフラットファイルサイズは取得対象レコードの種類や処理量により大幅に変動するため、環境毎のフラットファイルサイズのサンプル値を提示します。

対象ファイル : 詳細フラットファイル (YYYYMMDD.txt.gz または YYYYMMDD.txt)
データ収集間隔 : 15 分
データ蓄積期間 : 1 日 (96 インターバル)

データ種別	フラットファイルサイズに影響を与える代表的な変動要素の数	1 システム当たりの 1 日分のフラットファイルサイズ (gz 圧縮形式)	1 システム当たりの 1 日分のフラットファイルサイズ (テキスト形式)
Java (ケース 1)	JDBC 接続プール/JDBCDataSource 163/インターバル Servlet 情報 2821/インターバル 全レコード種別に対するレコード件数 4122/インターバル	約 6.3MB	約 42MB
Java (ケース 2)	JDBC 接続プール/JDBCDataSource 34/インターバル Servlet 情報 5/インターバル 全レコード種別に対するレコード件数 224/インターバル	約 0.3MB	約 2MB
Java (ケース 3)	JDBC 接続プール/JDBCDataSource 16/インターバル Servlet 情報 35/インターバル 全レコード種別に対するレコード件数 96/インターバル	約 0.2MB	約 1.3MB

2.2.5. Performance Web Service データベースのサイズ

ここでは、Performance Web Service データベースのサイズに関する参考情報を記載します。

CS シリーズの各製品によって作成された稼働実績グラフやシステム評価結果等の出力物は、Firebird 形式のデータベースである Performance Web Service データベース（PWS_DB）に蓄積されます。Performance Web Service データベース（PWS_DB）は、以下の 1 ファイルで構成されます。

・PWS_DB.FDB

(1)PWS_DB.FDB の増加サイズ

CS-MAGIC、CS-ADVISOR、および Flatfile Maintenance から出力されるデータを PWS_DB に蓄積する場合の増加サイズの目安は、以下の通りです。PWS_DB の定期メンテナンスが運用されていることを前提としています。

対象ファイル : PWS_DB.FDB
データ収集間隔 : -
データ蓄積期間 : 任意

データ種別	1 ファイルあたりの PWS_DB 増加サイズ
グラフファイル（数値情報を含む）	PNG 形式 : 約 30KB GIF 形式（旧バージョンでの保存形式） : 約 45KB
CS-ADVISOR 評価結果	約 50KB
Flatfile Maintenance データチェック結果	約 300KB※
PWS_DB 初期値	3712KB

※Flatfile Maintenance はチェック条件グループが複数存在する場合も、1 日あたりのアップロード数は 1 として集計します。

アップロードするデータの容量により増加量は前後します。

PWS_DB.FDB のバックアップを管理用マシンへ保管する場合は、PWS_DB.FDB サイズの約 2 倍の容量のディスクを準備してください。

バックアップの世代管理を行う場合は、バックアップ領域として、世代数+1 の容量が必要となります。

(2)PWS_DB.FDB の見積もり例

下記の式により、PWS_DB サイズの参考値を見積もります。

見積もり式

$$\begin{aligned} & \text{〔初期値〔3712KB〕+（1 日・1 システムあたりのグラフアップロード枚数 × システム数 × グラフ容量〔30KB〕} \\ & + 1 \text{ 日・1 システムあたりの評価枚数 × システム数 × 評価データ容量〔50KB〕} \\ & + \text{Flatfile Maintenance チェック結果サイズ〔300KB〕} \times \text{保存日数} \text{〕} / 1024 / 1024 = \text{PWS 見積もりサイズ（GB）} \end{aligned}$$

ケース 1

グラフは 1 システム・1 日あたり 20 枚、100 システム、2 年保存の場合
$$= (3712 + (20 \times 100 \times 30 + 1 \times 100 \times 50 + 300) \times 365 \times 2) / 1024 / 1024 = \text{約 46GB}$$

ケース 2

グラフは 1 システム 1 日あたり 20 枚、300 システム、1 年保存の場合
$$= (3712 + (20 \times 300 \times 30 + 1 \times 300 \times 50 + 300) \times 365) / 1024 / 1024 = \text{約 68GB}$$

2.3. サービス一覧

2.3.1. データ収集対象

Windows サービスとして稼働するデータ収集対象側の ES/1 NEO CS シリーズのサービスを次に示します。

プロダクト	インストール 初期状態	サービス表示名	先行サービス名
Windows Acquire	自動 – 開始	Athene Acquire	SQL Server データを取得する場合は、SQL Server (インスタンス名)

2.3.2. 管理用マシン

Windows サービスとして稼働する管理用マシン側の ES/1 NEO CS シリーズのサービスを次に示します。

プロダクト	インストール 初期状態	サービス表示名	先行サービス名
Control Center 12.20	自動 – 停止	Syncsort Capacity Management Control Center	SQL Server (インスタンス名)
	自動 – 停止	Syncsort Capacity Management Job Scheduler	–
	自動 – 開始	Syncsort Capacity Management Core Scheduler	SQL Server (インスタンス名)
Control Center 11.20	自動 – 停止	Athene Control Center	SQL Server (インスタンス名)
	自動 – 停止	Athene Job Scheduler	–
	自動 – 開始	Athene Scheduler	SQL Server (インスタンス名)
SQL Server	自動 – 開始	SQL Server (インスタンス名)	–

プロダクト	インストール 初期状態	サービス表示名	先行サービス名
CS-AWS	未登録	iim awsmon	–
CS-Hyper-V	未登録	iim hvmon	–
CS-Java	未登録	iim was collector	–
CS-Network MIB Collector	自動 – 開始	iim mib collector	–
CS-Network Packet Monitor	手動 – 停止	iim wiremon3	–
CS-Storage	未登録	iim stgmon	–
CS-Utility iim clock server	手動 – 停止	iim clock server	–
CS-Virtage	未登録	iim vtgmon	–
CS-VMware	未登録	iim vmwm4vc	–
ES/1 管理マシン ディスクチェック	自動 – 開始	iim es1 check disk	–
Performance Web Service	自動 – 開始	iim pws tomcat	Firebird Guardian – DefaultInstance Firebird Server – DefaultInstance
	自動 – 開始	Firebird Guardian – DefaultInstance	–
	手動 – 開始	Firebird Server – DefaultInstance	–

プロダクト	インストール 初期状態	サービス表示名	先行サービス名
管理コンソール	手動－停止	Firebird Guardian – iimmgmtdb	－
	手動－停止	Firebird Server – iimmgmtdb	－
	手動－停止	iim management console – baseservice	Firebird Guardian – iimmgmtdb Firebird Server - iimmgmtdb ※上記サービスは動作前提となっていますが、 「iim management console - baseservice」が稼働しているサーバとは 別のサーバで起動することもできます。

2.4. ポート番号一覧

2.4.1. 管理用マシン→データ収集対象

管理用マシン側に導入される ES/1 NEO CS シリーズの各製品からデータ収集対象に接続する際に使用するポート番号（データ収集対象側）を次に示します。

接続元：管理用マシン → 接続先：データ収集対象

プロダクト	プロトコル／サービス	接続先：デフォルトポート番号	備考
Control Center	SSH(SFTP)	22/TCP	接続方法は、Windows ファイル共有、FTP、SFTP から選択
	FTP	20/TCP 21/TCP ※パッシブモードでは転送ポートはランダム	
	NetBIOS CIFS	NetBIOS 名前サービス TCP/UDP 137 NetBIOS データグラム・サービス UDP 138 NetBIOS セッション・サービス TCP 139 ダイレクト・ホスティング SMB サービス TCP/UDP 445	

接続元：管理用マシン → 接続先：データ収集対象

プロダクト	プロトコル／サービス	接続先：デフォルトポート番号	備考
CS-AWS	HTTP	443/TCP	
CS-DB2 UDB snapshot monitor agent	DB2 connection port	50000/TCP	リモート収集のみ TCP/IP 接続が必要。ローカル収集では不要。
CS-Hyper-V	WMI	135/TCP、1024 以上の動的に割り当てられる TCP ポート	
CS-Java for Interstage	RMI	JavaEE 5 : 8686/TCP ※ (JMX Connector のポート番号) J2EE:12003、1024 以上の動的に割り当てられる TCP ポート	※Interstage で利用するポート番号すべてに対して、管理用マシンからのアクセス許可の設定を行ってください。
CS-Java for JBoss	RMI	1099/TCP (JMX 接続で使用するポート番号)	
CS-Java for OracleAS	OPMN ONS Request	6003/TCP (OPMN リクエストポート番号)	
CS-Java for Tomcat	RMI	Tomcat サーバの起動オプションにて指定するポート (JMX 接続で使用するポート番号)	

接続元：管理用マシン → 接続先：データ収集対象

プロダクト	プロトコル／サービス	接続先：デフォルトポート番号	備考
CS-Java for WebLogic	t3 または t3s	7001/TCP (WebLogic Server のリスポート番号)	
CS-Java for WebSphere	SOAP	8880/TCP (SOAP_CONNECTOR_ADDRESS ポート番号)	
CS-Network MIB Collector	SNMP サービス	161/TCP	
CS-RMON	HTTP	Zabbix サーバの Web フロントエンドに設定されているポート	
CS-Storage	HTTP または HTTPS	80/TCP または 443/TCP	
CS-Utility iim collect	SSH(SFTP)	22/TCP	接続方法は、 Windows ファイル共有、FTP、SFTP から選択
	FTP	20/TCP 21/TCP ※パッシブモードでは転送ポートはランダム	
	NetBIOS CIFS	NetBIOS 名前サービス TCP/UDP 137 NetBIOS データグラム・サービス UDP 138 NetBIOS セッション・サービス TCP 139 ダイレクト・ホスティング SMB サービス TCP/UDP 445	
CS-Virtage	HVM	623/UDP	
CS-VMware	HTTPS	443/TCP	

接続元：管理用マシン → 接続先：ドメインコントローラ

プロダクト	プロトコル／サービス	接続先：デフォルトポート番号	備考
Performance Web Service	LDAP	389	Performance Web Service にて Active Directory 連携指定を使用する場合のみ

2.4.2. データ収集対象→データ収集対象

データ収集対象側に導入される ES/1 NEO CS シリーズの各製品からデータ収集対象に接続する際に使用するポート番号（データ収集対象側）を次に示します。

接続元：データ収集対象 → 接続先：データ収集対象

プロダクト	プロトコル／サービス	接続先：デフォルトポート番号	備考
Windows Acquire	ネットサービス名接続	1521/TCP	Oracle データを収集する場合

接続元：データ収集対象 → 接続先：データ収集対象

プロダクト	プロトコル／サービス	接続先：デフォルトポート番号	備考
CS-MySQL	MySQL protocol	3306/TCP	

2.4.3. データ収集対象→管理用マシン

データ収集対象側に導入される ES/1 NEO CS シリーズの各製品から管理用マシンに接続する際に使用するポート番号（管理用マシン側）を次に示します。

接続元：データ収集対象 → 接続先：管理用マシン

プロダクト	プロトコル／サービス	接続先：デフォルトポート番号	備考
CS-Utility iim kickout	FTP	20/TCP 21/TCP ※パッシブモードでは転送ポートはランダム	

2.4.4. Performance Web Service 閲覧クライアント→管理用マシン

Performance Web Service 閲覧クライアントから管理用マシンに接続する際に使用するポート番号（管理用マシン側）を次に示します。

接続元：Performance Web Service 閲覧クライアント → 接続先：管理用マシン

プロダクト	プロトコル／サービス	接続先：デフォルトポート番号	備考
Performance Web Service	HTTP	8080/TCP	
	HTTPS	8443/TCP	

2.4.5. athene Portal 閲覧クライアント→管理用マシン

athene Portal 閲覧クライアントから管理用マシンに接続する際に使用するポート番号（管理用マシン側）を次に示します。

接続元：athene Portal 閲覧クライアント → 接続先：管理用マシン

プロダクト	プロトコル／サービス	接続先：デフォルトポート番号	備考
athene Portal	HTTPS	443/TCP	

2.4.6. 管理用マシン→管理用マシン

管理用マシン側に導入される ES/1 NEO CS シリーズの各製品から管理用マシンに接続する際に使用するポート番号（管理用マシン側）を次に示します。

接続元：管理用マシン → 接続先：管理用マシン

プロダクト	プロトコル／サービス	接続先：デフォルトポート番号	備考
pdbmagic2	TCP/IP	1433/TCP	
Performance Web Service Uploader	wire	3050/TCP	
管理コンソール	HTTP または HTTPS	9200/TCP 9201/TCP 9202/TCP 9203/TCP	Web サービス用 制御用 Base サービス用 データベース用

2.4.1.～2.4.6.に記載のポート番号はデフォルトポートを記載しています。実際の接続については、設定されているポート番号を確認してください。

2.5. ログファイル一覧

2.5.1. データ収集対象

データ収集対象側に導入される ES/1 NEO CS シリーズの各製品が出力するログファイルを次に示します。

プロダクト	パス	ログファイル名	デフォルト 上限サイズ
Unix/Linux Acquire	/<Acquire home>/oracle	ERRFILE_<ドメイン名>_<DB 名>.txt ※Oracle データ収集時にエラーが発生した場合のみ	－
Windows Acquire	¥<Acquire 導入フォルダ>¥scripts	OR_<ドメイン名>_nnnnnnnnn_I.txt ※Oracle データ収集時のみ	－

¥<Acquire 導入フォルダ> 例) C:¥IIM¥Metron¥Acquire

プロダクト	パス	ログファイル名	デフォルト 上限サイズ
CS-DB2 UDB snapshot monitor agent	/<udb agent home>/udbagtx	agt_<データベース別名>.log agt_<データベース別名>.log.0	1MB
	¥<CS 導入フォルダ>¥udbagtx	<データベース別名>.log <データベース別名>.log.0	4MB
CS-KVM ckvm	/<ckvm home>/ckvm	ckvm.log ckvm.log.0	4MB
CS-MySQL cmysql	/<cmysql home>/clcmysql	cmysql.log cmysql.log.0	4MB
CS-Utility iim kickout	/<kickout home>/kickout ¥<kickout 導入フォルダ>	logfile.txt	1MB
CS-WEB Option HTTP Log Processor logscn	/<logscn home> ¥<logscn 導入フォルダ>	logscn.log logscn.log.0	1MB
Oracle テーブルスペース情報収集機能 csqplus	/<csqplus home> ¥<csqplus 導入フォルダ>	csqplus.log csqplus.log.0	1MB
	/<csqplus home>/clorats	<SID>_sqlplus_out.txt	－
	¥<csqplus 導入フォルダ>	<ネットサービス名>_sqlplus_out.txt	－

2.5.2. 管理用マシン

管理用マシン側に導入される ES/1 NEO CS シリーズの各製品が出力するログファイルを次に示します。

プロダクト	パス	ログファイル名	デフォルト 上限サイズ
Control Center	C:\ProgramData\Metron\Logs	ControlCenter-<コンピュータ名>- YYYY-MM-DD-HH.zip ControlCenter-<コンピュータ名>- YYYY-MM-DD-HH.log AXL305-<ターゲット番号>-<コン ピュータ名>-YYYY-MM-DD-HH.log	—
Data Management	C:\ProgramData\Metron\Data Management\Schedules	<設定名>.log	—

プロダクト	パス	ログファイル名	デフォルト 上限サイズ
APM Interface for Dynatrace x2f	¥<CS 導入フォルダ>¥x2f	x2f.log x2f.log.0	4MB
CS-ADVISOR	¥<CS 導入フォルダ>	CS.log CS.log.0 csadvcr.log csadvcr.log.0	4MB
CS-AWS	¥<CS 導入フォルダ>¥awsmon	awsmon.log awsmon.log.0	4MB
		awsmon-trace.log awsmon-trace.log.*	10MB
CS-CONNECT etcmgx	¥<CS 導入フォルダ>¥etcmgx	etcmgx.log etcmgx.log.0	4MB
CS-DB2 udbmagic	¥<CS 導入フォルダ>¥udbmagic	udbmagic.log udbmagic.log.0	4MB
CS-Hyper-V hvmon	¥<CS 導入フォルダ>¥hvmon	hvmon.log hvmon.log.0	4MB
		hvmon-trace.log hvmon-trace.log.*	10MB
CS-i5 x2f	¥<CS 導入フォルダ>¥x2f	x2f.log x2f.log.0	4MB

プロダクト	パス	ログファイル名	デフォルト 上限サイズ
CS-Java iim was collector	¥<CS 導入フォルダ>¥wascl	wascl.log wascl.log.0	4MB
		wascl_Exception.log ※エラー発生時のみ	1MB
CS-JOB for JP1 x2f	¥<CS 導入フォルダ>¥x2f	x2f.log x2f.log.0	4MB
CS-KVM x2f	¥<CS 導入フォルダ>¥x2f	x2f.log x2f.log.0	4MB
CS-MAGIC	¥<CS 導入フォルダ>	CS.log CS.log.0	4MB
CS-MySQL x2f	¥<CS 導入フォルダ>¥x2f	x2f.log x2f.log.0	4MB
CS-Network ADVISOR	¥<CS 導入フォルダ>	CS.log CS.log.0	4MB
CS-Network MIB Collector iim mib collector	¥<CS 導入フォルダ>¥mibcl	mibcl.log mibcl.log.0	4MB
CS-Network Packet Monitor wmonpost	¥<CS 導入フォルダ>¥wmonpost	wmonpost.log wmonpost.log.0	4MB
CS-REPORT	¥<CS 導入フォルダ>	Csreport.log Csreport.log.0	4MB
CS-RMON	¥<CS 導入フォルダ>¥rmonmgx	rmonmgx.log rmonmgx.log.0	4MB
CS-SAP ERP SAP magic	¥<CS 導入フォルダ>¥r3mgx	r3mgx.log r3mgx.log.0	4MB
CS-Storage	¥<CS 導入フォルダ>¥stgmon	stgmon.log stgmon.log.0	4MB
		stgmon-trace.log stgmon-trace.log.*	10MB
CS-Utility iim clock server	¥<CS 導入フォルダ>¥iimclksv	iimclksv.log iimclksv.log.0	4MB
CS-Utility iim collect	¥<CS 導入フォルダ>¥iimcllct	iimcllct.log iimcllct.log.0	4MB
		iimssh-trace.log iimssh-trace.log.*	10MB

プロダクト	パス	ログファイル名	デフォルト 上限サイズ
CS-Virtage vtgmon	¥<CS 導入フォルダ>¥vtgmon	vtgmon.log vtgmon.log.0	4MB
		vtgmon-trace.log vtgmon-trace.log.*	10MB
CS-VMware vmwmon	¥<CS 導入フォルダ>¥vmwmon	vmwmon.log vmwmon.log.0	4MB
CS-VMware vmwm4vc	¥<CS 導入フォルダ>¥vmwm4vc	vmwm4vc.log vmwm4vc.log.0	4MB
		vmwm4vc-trace.log vmwm4vc-trace.log.*	10MB
CS-WEB Option HTTP Log Processor log2f	¥<CS 導入フォルダ>¥log2f	log2f.log log2f.log.0	4MB
ES/1 管理マシン ディスクチェック	¥<ES/1 管理マシン ディスクチェック導 入フォルダ>	es1chkdisk.log	4MB
Flatfile Maintenance データ検査 データ集約	¥<CS 導入フォルダ>¥FFM	Ffmainte.log Ffmainte.log.0	4MB
Flatfile Maintenance データ管理	¥<CS 導入フォルダ>¥FFM	FFBackup.log FFBackup.log.0	4MB
Log Utility	¥<Log Utility 導入フォルダ>	LogUtil.log LogUtil.log.0	4MB
MF-z/VM x2f	¥<CS 導入フォルダ>¥x2f	x2f.log x2f.log.0	4MB
Performance Web Service Maintenance	¥<PWS 導入フォルダ >¥PWSMaintenance	pwsmaint.log pwsmaint.log.0 pws-maintenance-trace.log pws-maintenance-trace.log.*	4MB
	¥<PWS 導入フォルダ >¥PWSMaintenance¥pws	pws-m-trace.log pws-m-trace.log.*	10MB
Performance Web Service Uploader	¥<PWS 導入フォルダ>¥Uploader	PWSUploader.log PWSUploader.log.0	4MB
		uploader-trace.log uploader-trace.log.*	10MB
Performance Web Service 管理者設定機能 閲覧機能	¥<PWS 導入フォルダ >¥Server¥Tomcat¥logs	pwsmanager-trace.log pwsmanager-trace.log.* pwsserver-trace.log pwsserver-trace.log.*	4MB
		フォルダ内の他ファイル	—
pdbmagic	¥<CS 導入フォルダ>¥pdbmagic	PdbMagic.log PdbMagic.log.0	4MB
pdbmagic2	¥<CS 導入フォルダ>¥pdbmagic2	pdbmagic2.log pdbmagic2.log.0	4MB
		pdbmagic2-trace.log pdbmagic2-trace.log.*	10MB

プロダクト	パス	ログファイル名	デフォルト 上限サイズ
インポート処理	¥<CS 導入フォルダ>	CS.log CS.log.0	4MB
		CSimport.log CSimport.log.0	1MB
管理コンソール	¥<管理コンソール導入フォルダ>¥db	mgmtconsole.fdb 管理マシンのイベントログ 管理コンソール画面の操作ログ画面	—

¥<CS 導入フォルダ>

例) C:¥IIM¥CS

¥<ES/1 管理マシン ディスクチェック導入フォルダ>

例) C:¥IIM¥UTIL¥es1chkdisk

¥<Log Utility 導入フォルダ>

例) C:¥IIM¥LOG

¥<PWS 導入フォルダ>

例) C:¥IIM¥PWS

¥<管理コンソール導入フォルダ>

例) C:¥IIM¥mgmtconsole

2.6. リターンコード一覧

2.6.1. リターンコード

ES/1 NEO CS シリーズの各製品が返すリターンコードを次に示します。

リターンコード	意味
0	正常に終了しました。
4	警告レベルのログが出力されました。
8	停止レベルのログが出力されました。
16	ユーザにより処理はキャンセルされました。※

※バッチ実行をタスクトレイからキャンセルできるプロダクトのみ返します。

メモ！

リターンコードはログファイル、イベントログの出力レベルと連動します。出力レベルが「0」の場合は、リターンコードは0、または16のみを返し、4、8を返しません。出力レベルが「8」の場合は、0、8、16を返し、4を返しません。リターンコードをチェックする場合はログファイル、イベントログ、いずれかの出力レベルを2、または4に設定してください。出力レベルの詳細については、別紙マニュアル「Log Utility 使用者の手引き 8.2. 出力レベル」を参照してください。

2.6.2. データ収集対象

データ収集対象側に導入される ES/1 NEO CS シリーズの各製品におけるリターンコードのサポートを次に示します。

プロダクト	リターンコードのサポート
Unix/Linux Acquire	×
Windows Acquire	×

プロダクト	リターンコードのサポート
CS-DB2 UDB snapshot monitor agent	×
CS-KVM ckvm	×
CS-MySQL cmysql	×
CS-Utility iim kickout	×
CS-WEB Option HTTP Log Processor logscn	×
Oracle テーブルスペース情報収集機能 csqplus	×

2.6.3. 管理用マシン

管理用マシン側に導入される ES/1 NEO CS シリーズの各製品におけるリターンコードのサポートを次に示します。

プロダクト	リターンコードのサポート
Control Center	×
Data Management	×

プロダクト	リターンコードのサポート
APM Interface for Dynatrace x2f	○
CS-ADVISOR	○
CS-AWS	×
CS-CONNECT etcmgx	○
CS-DB2 udbmagic	○
CS-Hyper-V hvmon	×
CS-i5 x2f	○
CS-Java iim was collector	×
CS-JOB for JP1 x2f	○
CS-KVM x2f	○
CS-MAGIC	○
CS-MySQL x2f	○
CS-Network ADVISOR	○
CS-Network MIB Collector iim mib collector	×
CS-Network Packet Monitor wmonpost	○
CS-OracleAWR x2f	○
CS-REPORT	○
CS-RMON	○
CS-SAP ERP SAP magic	○
CS-Storage	×
CS-Utility iim clock server	×
CS-Utility iim collect	○
CS-Virtage vtgmon	×
CS-VMware vmwmon	×
CS-VMware vmwm4vc	×
CS-WEB Option HTTP Log Processor log2f	○
ES/1 管理マシン ディスクチェック	×

プロダクト	リターンコードのサポート
Flatfile Maintenance	○
Log Utility	○
MF-z/VM x2f	○
Performance Web Service Maintenance	○
Performance Web Service Uploader	○
Performance Web Service 管理者設定機能／閲覧機能	×
pdbmagic	○
pdbmagic2	○
管理コンソール	×

2.7. ウィルススキャンの除外対象一覧

ウィルススキャンソフトウェアによって ES/1 NEO CS シリーズの各製品の動作が妨げられる場合があります。
ここでは、ウィルススキャンの除外対象とするフォルダについて記載します。

2.7.1. データ収集対象

データ収集対象側のウィルススキャン除外対象フォルダを次に示します。

プロダクト	対象フォルダ	デフォルトのパス
Windows Acquire	Windows Acquire 収集データ出力フォルダ	C:\ProgramData\Metron\Acquire\APMOut
Unix/Linux Acquire	Unix/Linux Acquire 導入ディレクトリ	Acquire 用ユーザ ID のホームディレクトリ
HTTP Log Processor (logscn)	logscn 導入ディレクトリ	Unix/Linux 環境 logscn 用ユーザ ID のホームディレクトリ Windows 環境 任意の logscn 導入用フォルダ
	logscn 収集データ出力ディレクトリ	logscn -o output-directory で指定
Oracle テーブルスペース (csqplus)	csqplus 導入ディレクトリ	Unix/Linux 環境 csqplus 用ユーザ ID のホームディレクトリ Windows 環境 任意の csqplus 導入用フォルダ
DB2	UDB snapshot monitor agent 導入ディレクトリ	Unix/Linux 環境 UDB snapshot monitor agen 用ユーザ ID のホームディレクトリ Windows 環境 C:\IIM (プログラムファイル) C:\IIM_DATA (データファイル) C:\IIM_WORK (ワークファイル)
MySQL	cmysql 導入ディレクトリ	cmysql 用ユーザ ID のホームディレクトリ
KVM	ckvm 導入ディレクトリ	ckvm 用ユーザ ID のホームディレクトリ
Packet Monitor	wiremon3 導入ディレクトリ	C:\IIM\CS\wiremon3
	wiremon3 収集データ出力ディレクトリ	wiremon3.conf で指定 sys_output=D:\IIM_WORK\WMONOUT
MIB Collector	mibcl 導入ディレクトリ	C:\IIM\CS\mibcl
	mibcl 収集データ出力ディレクトリ	・ES/1 NEO CS シリーズが同一マシン内にインストールされている場合は、ES/1 NEO CS シリーズのインポートフォルダ設定画面の「中間フラットファイル出力フォルダ」のリストの先頭に設定されている ・ES/1 NEO CS シリーズが同一マシン内にインストールされていない場合 C:\IIM_WORK\CS\PDBOUT

2.7.2. 管理用マシン

管理用マシン側のウィルススキャン除外対象フォルダを次に示します。

プロダクト	対象フォルダ	デフォルトのパス
Control Center	SQL Server 導入フォルダ	C:\Program Files\Microsoft SQL Server
		C:\Program Files (x86)\Microsoft SQL Server
	AthenePDB 格納フォルダ	C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL14.MSSQLSERVER\MSSQL
		C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL13.MSSQLSERVER\MSSQL
		C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL12.MSSQLSERVER\MSSQL
		C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL11.MSSQLSERVER\MSSQL
		C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL10_50.MSSQLSERVER\MSSQL
	Control Center 導入フォルダ	C:\Program Files (x86)\Athene
	Control Center ワークフォルダ	C:\ProgramData\Metron
CS シリーズ全般	CS シリーズ全般導入フォルダ	C:\IIM
	CS データ格納フォルダ	C:\IIM_DATA
	CS ワークフォルダ	C:\IIM_WORK

2.8. 製品仕様に関する考慮事項

2.8.1. CS シリーズ全般

(1) サイト／システム名に使用できる文字集合

○詳細内容

サイト／システム名は全角 31 文字以内、半角 63 文字以内で指定してください。また、下記の文字は使用できません。

- ・半角片仮名
- ・¥ / : , ; * ? " < > | .
- ・#
- ・機種依存文字（①②③..., I II III..., (株)^{ドル}会社...等）
- ・JIS X 0201、JIS X 0208（Shift_JIS、CP932、Windows-31J）に含まれない文字、および、外字

また、Windows のファイル名、ディレクトリ名として使用できない予約名についてもサイト／システム名として使用できません。

- ・CON、PRN、AUX、CLOCK\$, NUL、COM0～COM9、LPT0～LPT9

○影響

CS シリーズの各プロダクトが正常に動作しない場合があります。

○対応方法

サイト／システム名登録時に、禁則文字の使用は避けてください。

(2) フラットファイルで使用できる文字集合

○詳細内容

ES/1 のフラットファイルは JIS X 0201、JIS X 0208（Shift_JIS、CP932、Windows-31J）で格納されている必要があります。

○影響

これ以外の文字（Unicode 固有文字、機種依存文字等）が格納されていた場合、出力物の表示内容が文字化けしたり、想定外の出力が行われる可能性があります。

○対応方法

特に無し。

(3) マイナス値の取り扱い

○詳細内容

ES/1 出力時に数値データとしてマイナス値を出力することができません。

○影響

マイナスの数値を出力することができないため、マイナス値を含むグラフの描画は行えません。

○対応方法

特に無し。

(4) クラスタ構成のデータベース環境でのデータ収集

○ 詳細内容

クラスタ構成の場合、稼働系/待機系状態に関わらず両方のサーバからデータを取得します。

○ 影響

待機系環境では、データベースが起動していないためデータベースに関する情報は取得されず、データ収集エラーがログメッセージに出力されます。

○ 対応方法

ES/1 エージェントの稼働ログを監視している場合は、待機系サーバでのデータベースデータ取得時に発生するエラーを、監視対象外としてください。

(5) ES/1 導入フォルダ配下へのファイル・フォルダ配置

○ 詳細内容

ES/1 導入フォルダ配下には、ES/1 プログラム以外のファイル・フォルダを配置することはできません。

○ 影響

ES/1 プロダクトの動作に不具合が出る場合があります。

○ 対応方法

特に無し。

(6) CS-MAGIC 取扱い可能なファイルのフルパス上限

○ 詳細内容

Excel が取り扱うファイルのフルパス長が下記の上限值を超える場合、CS-MAGIC にて取り扱うことができません。

- ・「Microsoft Excel のグラフ作成エンジンを使用する」場合：218 バイト
- ・「Microsoft Excel の使用を最小限としグラフを作成する」場合：218 文字

CS-MAGIC が出力するグラフファイルのフルパス長は、標準で下記の情報が出力されますので、サイト／システム名やグラフファイル名が長い場合は、フルパス長の上限を超えないよう注意してください。

標準的なグラフファイル出力例)

C:\¥IIM_DATA¥CS¥GRAPHOUT¥<サイト名>¥<システム名>¥YYYYMMDD_YYYYMMDD_<サイト>_<システム>_<グラフ名>.xlsx

○ 影響

フルパス長が上限値を超えた場合、Excel で取り扱える長さに自動で切り詰める処理を行います。

○ 対処方法

フルパス長が上限値を超えないよう下記いずれかを変更し文字数を削減してください。

- ・サイト名
- ・システム名
- ・グラフファイル名
- ・グラフファイル出力パス
- ・出力ファイル名の形式

(7)パスワードの変更と有効期限

○詳細内容

ES/1 のデータ収集に利用しているアカウントのパスワードは基本的に無期限としてください。

○影響

パスワードの期限が切れた場合や、パスワードが変更された場合はデータ収集に失敗します。

○対応方法

特に無し。

(8)グラフの系列数上限

○詳細内容

グラフの系列として出力可能な数は最大で 255 となります。

○影響

255 以上の系列を指定してグラフ出力するとエラーが発生し、グラフファイルが作成されません。

○対応方法

系列数が 255 を超える可能性があるグラフについては、予め系列数を 255 未満に制限してクエリーを実行してください。
CSV ファイル形式であれば出力できます。

(9)Performance Web Service で表示されるグラフタイトルの上限

○詳細内容

Performance Web Service で表示されるグラフタイトルは全角 64 文字、半角 128 文字で制限されます。

\$ で始まる置換文字列、\$SITE、\$SYSTEM、#{ORDBF}、#{UDBDBF} 等、埋め込み文字列が解決された文字数の上限です。

○影響

Performance Web Service で上記文字数までのグラフタイトルが表示され、上記文字数を超える文字列は表示されません。

○対応方法

グラフタイトルを全角 64 文字以内、半角 128 文字以内で指定してください。

(10)Performance Web Service からダウンロード可能なファイル

○詳細内容

Performance Web Service から以下の情報をファイルとしてダウンロードするファイルのファイル名に「,(カンマ)」を使用しないでください。

○影響

ブラウザ Google Chrome、Microsoft Edge の制限により、ファイル名に「,(カンマ)」を含むファイルをダウンロードすることはできません。

○対応方法

Performance Web Service へアップロード対象とする報告書・グラフ等については、設定時に「,(カンマ)」を使用せず設定してください。

機能	ダウンロード可能な情報	設定値
CS-MAGIC	グラフの数値情報(CSV)	CS-MAGIC クエリー定義機能 カスタマイズしたクエリーのグラフタイトル
CS-REPORT	報告書	報告書ファイル名
CS Scripting Interface	数値情報(CSV)等の Performance Web Service からダウンロード可能とするファイル	出力ファイル名等(連携する機能による)

2.9. 管理用マシンの運用に関する考慮事項

2.9.1. CS シリーズ全般

(1) データ収集対象サーバおよび管理用マシンの日付・時刻変更

○ 詳細内容

データ収集中に管理用マシンの時刻、およびデータ収集対象サーバの時刻を変更することは仕様外の動作となります。時刻同期による若干の範囲での時刻変更は問題ありません。

○ 影響

ES/1 では一部のプログラムにてデータ収集の最終日時を記録し、最終日時以前のデータをフラットファイルとして抽出しないよう制御しております。

そのため、日付や時刻の変更によりデータ収集の最終日時が一時的に未来日時に変更された場合、時刻を戻してもそれ以前のデータが収集されない等の問題が発生します。

また、一部のプログラムではファイルの更新日付でデータを管理しているため、日付や時刻の変更によりデータ削除の運用に支障が発生する可能性があります。

○ 対応方法

特に無し。

(2) サイト／システム名の変更

○ 詳細内容

サイト／システム名は容易に変更できませんので、継続的に使用可能な名称を登録してください。

○ 影響

サイト／システム名は下記に反映されます。

- ・CS シリーズの入力データファイルを格納するフォルダ名
- ・CS シリーズの出力結果ファイル名の一部
- ・CS シリーズの出力結果ファイルを格納するフォルダ名
- ・CS シリーズの出力結果を Web コンテンツ化して Web ブラウザで閲覧する際のパス名
- ・CS シリーズの出力結果を Web コンテンツ化して専用データベースに登録する際の識別名

○ 対応方法

将来的に変更する可能性が発生する名前は避けてください。

【サイト／システム名として推奨できない例】

- ・次期システム
- ・本番システム
- ・テスト期間中システム

(3) ユーザアカウント制御(UAC)の無効化

○詳細内容

ユーザアカウント制御(UAC)無効化の設定が必要となります。

○影響

UAC が有効になっている場合、設定中に UAC による起動のブロック画面が表示される場合があります。

○対応方法

ES/1 を実行する場合は以下を設定してください。

- ・ユーザアカウント制御(UAC)の無効化
- ・ローカルセキュリティポリシーの「ユーザアカウント制御：管理者承認モードですべての管理者を実行する」の無効化

(4) PuTTY を使用する場合のユーザアカウント

○詳細内容

データ収集対象サーバと Control Center の間の通信に PuTTY を使用する場合は、ES/1 管理用マシンにおける次のユーザは同一ユーザを使用する必要があります。

- ・ES/1 管理用マシンの構築作業時のログオンユーザ
- ・CS シリーズ導入後の各種設定変更作業時のログオンユーザ
- ・Control Center サービスの実行ユーザ（※）
※PuTTY を使用する場合は、ローカルシステムアカウントは使用できません。

○影響

異なるユーザを使用した場合、PuTTY を使用した SSH 通信ができません。

○対応方法

同一ユーザを使用してください。

(5) タスクスケジューラに関連するローカルセキュリティポリシー設定

○詳細内容

管理用マシンではローカルセキュリティポリシー設定にて、下記項目を「無効」とする必要があります。

- ・ローカルポリシー - セキュリティオプション設定
ネットワークアクセス：ネットワーク認証のためにパスワードおよび資格情報を保存することを許可しない

○影響

設定が有効の場合は、タスクスケジューラ等への登録時に実行ユーザのパスワードを保持することができません。

○対応方法

ローカルセキュリティポリシー設定にて、上記項目を「無効」としてください。

(6)システムロケールの設定

○詳細内容

ES/1 管理用マシンの OS (Windows Server) のシステムロケールは「日本語 (日本)」に設定されている必要があります。

○影響

システムロケールが「日本語 (日本)」に設定されていないと、Control Center が使用するパフォーマンスデータベース (PDB) を作成できません。

CS シリーズの各製品が正常動作しません。

○対応方法

「コントロールパネル」→「地域」→「管理」タブ→「Unicode 対応でないプログラムの現在の言語」で確認できます。

第3章 添付資料

3.1. 添付資料 A. ES/1 NEO CS シリーズで扱うパフォーマンスデータのソース

3.1.1. データ項目対応表_AIX

こちらの[リンク](#)から PDF ファイルを開いてください。

3.1.2. データ項目対応表_HP-UX

こちらの[リンク](#)から PDF ファイルを開いてください。

3.1.3. データ項目対応表_Solaris

こちらの[リンク](#)から PDF ファイルを開いてください。

3.1.4. データ項目対応表_Linux

こちらの[リンク](#)から PDF ファイルを開いてください。

3.1.5. データ項目対応表_Windows

こちらの[リンク](#)から PDF ファイルを開いてください。

3.1.6. データ項目対応表_SQLServer

こちらの[リンク](#)から PDF ファイルを開いてください。

3.1.7. データ項目対応表_IIS

こちらの[リンク](#)から PDF ファイルを開いてください。

3.1.8. データ項目対応表_Oracle

こちらの[リンク](#)から PDF ファイルを開いてください。

3.1.9. データ項目対応表_Symfoware

こちらの[リンク](#)から PDF ファイルを開いてください。

3.1.10. データ項目対応表_DB2

こちらの[リンク](#)から PDF ファイルを開いてください。

3.1.11. データ項目対応表_HTTP

こちらの[リンク](#)から PDF ファイルを開いてください。

3.1.12. データ項目対応表_WebSphere

こちらの[リンク](#)から PDF ファイルを開いてください。

3.1.13. データ項目対応表_OracleAWR

こちらの[リンク](#)から PDF ファイルを開いてください。

3.1.14. データ項目対応表_WebLogic

こちらの[リンク](#)から PDF ファイルを開いてください。

3.1.15. データ項目対応表_JBoss

こちらの[リンク](#)から PDF ファイルを開いてください。

3.1.16. データ項目対応表_Tomcat

こちらの[リンク](#)から PDF ファイルを開いてください。

3.1.17. データ項目対応表_VMware

こちらの[リンク](#)から PDF ファイルを開いてください。

3.1.18. データ項目対応表_JOB for JP1

こちらの[リンク](#)から PDF ファイルを開いてください。